

2017年11月26日

聖書：ルカによる福音書 17章 11-19節 タイトル：戻って来た一人に！

序 論

- 「感謝の大切さ」について、聖書は、詩篇 136 篇を始め、いたるところで、繰り返し強く主張している。
- 先週に引き続き、アドベント・シーズンに入る前に、今年、ご一緒にもう一度皆さまと、この「感謝」について考え、み言葉からメッセージを頂きたい。
- 今日の聖書の箇所は、ルカによる福音書 17 章に記されている「10 人の重い皮膚病(古い訳では、「らい病」、最近の新改訳では、ツアラアト、今で言う「ハンセン氏病」に当たるかもしれない)にかかっていた人々が癒された出来事」から、この「感謝」のことについて、神様からメッセージを頂きたい。

本 論

I. この出来事から学ぶ第一のメッセージは「私たちは皆全員、神様に感謝する理由を持っている」と言う事実である。換言するなら、皆が感謝するべきであり、感謝しなくて良い人、感謝のない人はいないということである。

A. イエス様は 17 節で明確に言われた。「**十人**いやされたのではないか？」と。この点で英語 NIV はもっとハッキリしている。“Were not **ALL** ten cleansed?” (もともと原語では、ALL はないが、意味はそうである)

1. イエス様がここで「10 人」と言われたとき、それは「全員」を意味していた。
2. なぜなら、イエス様は、10 人全員を、この難病、重病から、見事に癒し、救いだされたからである(14, 15, 17)。
3. 一人だけではない。イエス様は、「10 人全員」を癒し、祝福されたのである。
4. 即ち、10 人全員が、神様に「感謝」を捧げる理由を持っていたのである。
5. だからこそ、イエス様は、一人だけでなく、10 人全員が、感謝を捧げるためにイエス様のところに戻ってくることを期待されたのである。
6. しかし、実際に戻って来たのは、一人だけだった。それゆえ、イエス様は、「後の 9 人は、どうしたのか?!」と、嘆かれたのである。

B. 私たちはどうであろうか？

1. まず、私たちも、**みな全員**、この重病が癒された 10 人の人々に勝るとも劣らない素晴らしい祝福を、一杯、神様から頂いてきたことを覚えたい。
 - (1)神様の祝福は、第一に、私たちのごく普通の、当たり前だと思っている生活の中に溢れていることを認識したい。
 - 多くの人々が、「私は、特に感謝するようなことを、神様から何もして頂いていない」と言わんばかりに、感謝の少ない、否、むしろ不平に満ちた人生を歩んでいる。
 - なぜか？ 毎日の通常の生活を、当たり前、当然のこととしか感じていないからである。
 - ほとんどの人のほとんどの人生は、毎日が平凡である。monotonous で、drudgery である。平凡で、何の変哲もない、退屈とさえ感じる生活の繰り返しかもしれない。
 - 人生の幸福とは、そのような monotonous で、drudgery な人生をどのように生きるかである。言い換えるなら、人生の幸福のカギ、幸せと不幸せの分岐点は：
 - 特別なことがあったときだけ、興奮して喜び、感謝する人か、
 - それとも、当たり前のこと、普通のこと、感動と感謝を覚えられる人かである。
 - これを、ある人は言う。「平凡を非凡に生きる」。
 - もう 30 年以上も前のことであるが、日本にいるときは見向きもしなかった「演歌」を私に米国で初めて紹介して下さった日本人牧師がいる。その彼が、五木ひろしの「川は流れる橋の下」の歌詞について冗談のように言った。「この歌を聞かたびに思うが、川が橋の下を流れるのは当たり前じゃない。何でそんなことをわざわざ歌うのか?!」。
 - 冗談とは知りつつも、そのときは、私もそうだなと思った。しかし、今は「人生の豊かさや新発見というものは、むしろ、しばしばそんな日頃当たり前だと思っていることに感動や感謝や、不思議さ、神秘さを覚えるところから生まれるのだ」と思っている。

- 「リンゴの実が木から落ちる」と言う現象は、誰もが当たり前のことと特に気に留めない。しかし、J. ニュートンは、そこに目を留めた。当たり前と片付けず、その背後に何かがあるはずと考えた。それが「万有引力」という偉大な発見を生み出したのである。
 - 水野源三氏は、病気のために10歳から「瞬き」以外体を動かすことができなくなった重度の身障者である。15才でイエス様と出会い、それから「瞬き」で意思を表す詩人となり、人々の心を慰める沢山の詩を書いた。その一つに、「新聞の臭いに朝を感じ」というのがある。彼は、無造作に自分の顔の前に置かれた新聞のインクの匂いに、新しい朝の到来をFreshに感じ、感謝し、力としたのである。私たちが当たり前だと思っている出来事、事象の一つ一つに新鮮な神様の恵みを感じていたのである。
 - それは、私たちもまた同じである。クリスチャン生涯の豊かさ、輝き、力は、毎日の普通の生活に起こっている当たり前の出来事の一つ一つを、当たり前のこととせず、その一つ一つに感動し、感謝する生涯の中にある。だから聖書は言う。「いつも喜びなさい。絶えず祈りなさい。すべての状況において感謝しなさい」と。
 - 聖書は言う。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主のよくしてくださったことを何ひとつ忘れるな」(詩篇103:2)。「何一つ」である、即ち、大きいことだけでなく、小さいことも、うっかり忘れてしまいそうなことも、何一つ忘れないで感謝し、主をたたえることである。
- (2)第二に、神様の祝福は、私たちの人生の「危機的」なときにも、しばしば顕される。
- この10人の重い皮膚病を患っていた人々が経験したことはまさにそれであった。重い病という通常ではない問題を抱え、彼らはその中で、奇跡的とも言うべき神様の祝福を経験したのである。
 - 先の詩篇103篇3-4節を見ると、そこにもそのことが記されている。
 - そこには、この詩篇の作者が、神様から、病のときにいやして頂き、いのちの危険や人生のピンチから救ってもらったことなどが記されており、彼はそれを感謝し、主をたたえている。
 - 私自身のことを言わせて頂くなら、私も病気からの癒しを経験させて頂いた。7年ほど前になるが、不整脈の診断を受け、最終検査の結果心臓にステントとペースメーカーのようなものを入れることになった。しかし、手術の日、全身麻酔までかけたその直後に、それらの必要がないという決断が緊急にくだされただけでなく、その後の検査においても、実際の体の兆候でも、一切不整脈の問題は消えてしまった。癒されたのである。
 - 経済的な経験でも、米国での留学生時代であったが、月の生活費が家族4人で\$500であったとき、フード・スタンプにお世話になった時代、健康保険が学生保険で掛け金が少ない一方、カバーがほとんどなかった時代、そんな中で、子供が2時間で4回もひきつけを起こし、入院することになり、お金のことが心配で、お医者さんに心配されながらも、二日で子供を中途退院させたり、それでも借金を暫く抱えることになったとき、また子供に誕生日やクリスマスのプレゼントを買うお金がなかったとき、・・・などなど、様々なところを通った。皆さまの中にも同様な経験を通られた方もあられると思うが、神様は、そのような危機の中、いつも助けてくださって、ここまで来ることができた。それは、主が主ご自身の方法で、考えられないような祝福与えてくださった一つ一つ、奇跡の道であった。
 - 主は、人間的にどうにもならないような状況の中で、奇跡的祝福と勝利を与えてくださる。その例には枚挙にいとまがない。
 - レーナ・マリアさんもその一人である。日本でもよく知られている人物である。1991年にテレビ朝日の「ニュース・ステーション」で全国に紹介され、1998年の長野冬季パラリンピックの開会式で歌声を披露した。彼女は生まれながら両腕がなく、左足の長さが右足の半分しかないという原因不明の障害を抱える人生であった。その中で、信仰をもって一生懸命生きて来た人であったが、決してすべてが順調であった訳ではない。燃え尽き症候群の苦しみも、10年の結婚生活の後、離婚という悲しみと痛みも経験し

た。しかし、その中で、彼女は言う。「もし私が障害をもって生まれていなかったら、今のような私にはならなかったでしょう。そうすれば、今味わっているほどワクワクするような人生は送れなかったに違いないと思うのです」と。

- 私たちは、このような、人生の様々な危機的状況の中で、多くの祝福を受けて来た。それを、「喉元(のどもと)過ぎれば熱さを忘れる」式に、忘れてはならない。詩篇 103 篇の作者のように感謝をし、主をほめたたえる者でありたい。

(3) 私たちは、更にこれらの肉体的、物質的、精神的、地上的救いと祝福に加えて、

- 「罪」からの救いと言う祝福を神様から頂いた。
- それを詩篇 103 篇の作者も 3 節で「主はあなたのすべての咎(とが)を赦し」と記す。
- 即ち、それは、魂の救い、良心の咎めからの救い、永遠の命への救い、即ち、神様の子としてどんなときでも地上であれ、天であれ永遠に神と共に生きる救いを意味していた。
- それは、物質的、経済的、肉体的祝福を越えた祝福である。そのことは、ダビデ王や、ソロモンが自らの人生で経験したことである。
- 即ちお金では買えない祝福である。

(4) これらの祝福が、今日学んでいる「重い皮膚病」で苦しんでいた 10 人の人達が、また、今ここにいる私たちすべてが経験している神様からの祝福である。

2. にも関わらず、主に感謝し、崇めるために戻ったのは、10 人の内 1 人だけであったように、あの 9 人だけでなく、今も、多くの人々が、主から一杯の恵みと祝福は受けながらも、主に感謝し、崇めるために主の下に来ようとはしていない。私たちは、どうであろうか？

II. この出来事から学ぶ第二のメッセージは、「感謝」と「喜び」の違いに関してである。

A. 今も学んだように、10 人全員が、神様の祝福を受けて、ハンセン氏病にも匹敵すると思われる大病(特に当時は尚のこと)からの完全ないやしを経験したのである。

1. 既に学んだように、10 人全員が神に感謝し、称えるべき十分な理由を持っていたのである。
2. しかし、それを実際にしたのはたった一人であり、後の 9 人はそれをしなかったのである。

B. このことが意味することは何か？

1. ここで確実なことは、いやしを経験した「10 人」全員が、その病からのいやし、大病から救われたことで「大喜び」したことである。彼らが全員「喜んだ」ことは確実、明瞭である。
2. 即ち「喜んだ」のは 10 人全員であった。しかし 16 節が記しているように、神を崇めつつ戻って来て「イエスの足もとにひれ伏して『感謝』した」のはその内 1 人だけであった。
3. 私たちが注目すべきは、聖書がこの違いを明確に強調していることである。

(1) 17-19 節を見て頂きたい。「9 人はどこにいるのか？」と言うイエス様の言葉には、怒りとも、失望とも、嘆息・慨嘆とも言える嘆きが明らかである。

(2) 明らかなことは、イエス様は彼らが「喜んだ」だけでは満足されなかったのである。

(3) 言い換えるなら、「彼らが喜んでいたら、それで良いよ。何もわざわざ私のところに戻って来て、お礼など言わなくても良いよ」とは言われなかったことである。

(4) 明確に、イエス様は、ここで 10 人全員に、あの一人のサマリヤ人のように、そして、私たちに、神様から頂いた救いと祝福を単に「喜ぶ」だけでなく、「感謝する」ことを求めておられるのである。

(5) 「喜び」と「感謝」は違う。

- 喜びは、自己の内でも始まり自己の中で、単に「嬉しい」という感情を持つだけで終われる。「自己完結」できるのである。文法的には自動詞である。
- しかし、他方、感謝は、英語で GIVE THANKS というように、「何を」「誰に」と言うように、直接・間接目的を要する「他動詞」である。
- 感謝は、確かに喜びから始まるが、そこで終わらない。「感謝」は、漢字でも、喜び、嬉しいと「感」じたことを「言(葉)」で「射る」と書くように、誰かに向かって、どこかに向かって弓で矢を射るように、その気持ちを具体的に表すことである。
- 即ち、感謝は、単なる思いや感情でなく、言葉を含めた、具体的行為である。

- 即ち、それは、単に感じるだけ、思うだけでなく、あの一人のサマリア人が、わざわざイエス様のところに戻って来て、ひれ伏し礼拝したように、実際に、私たちの言葉や行動で表さなければならない。それが感謝である。

III. 最後に、この「感謝」と言う行為がなぜ、そのように大切なのか？を学びたい。

A. それは、イエス様によるなら、キリスト教信仰の中心問題である「救い」を左右するからである。

1. イエス様は、この感謝を捧げるために戻ってきた一人のサマリア人だけに、この出来事の締めくくり 19 節で「あなたは救われた」と言われた。
 - (1)それは、単に病気が治ったという以上の意味を持っている。
 - (2)即ち、今日私たちが救われましたというのと同じ意味での救いである。
2. 他の9人には、病気が治る・癒されることを約束され、彼らはそれを経験しただけであった。
3. このことを説明するために「聖書の翻訳」の問題に触れたい。
 - (1)新改訳聖書では 19 節を「・・・あなたの信仰があなたを直したのです」と訳している。
 - (2)しかし、新共同訳は、これを「あなたの信仰が、あなたを救ったのです」と訳している。
 - (3)原語は、「ソウソウ」(救い)である。それは、体の癒しも、魂の救いも含めた、キリスト教信仰における救いの全貌を表わす言葉であり、キリスト教神学における「救済論」と言う用語の英語 Soteriology の語源となった言葉である。
 - (4)そもそも、この出来事の中で、病気が「直った」、「癒された」という意味を表わすために 14、15、17 節で使われているギリシャ語原語は、上述した 19 節の「ソウソウ」ではなく、「カサリソウ」と言う言葉であり、新改訳聖書では、「癒された」と訳している。
 - この「カサリソウ」という言葉は、「病気の癒し」を表わすために聖書がしばしば用いている言葉である。そして、
 - 「癒される」、「直る」「清められる」(病気はしばしば「穢れ(けがれ)」たものと考えられていたため)などと訳されている。
4. これらから次のことが言える。14、15、17 節で問題にされている「病気が癒される(カサリソウ)こと」については、イエス様は、既に 10 人全員が経験していたことは知っておられた。それゆえ 19 節で、イエス様が、「感謝するため」「神を崇めるため」に戻ってきた一人のサマリア人にのみ言った「ソウソウ」という言葉は、今更、「病気が直った」意味ではない。即ち、単に「病の癒し」ではなく、もっと深い、広い意味で、新共同訳のように「救った」「救われた」と訳されるべきである。
5. 即ち、他の 9 人は単に肉体の癒しを経験したに留まった。しかし、この一人のサマリア人だけは、肉体の癒しを越えた、まことの救い、即ち、魂の救いを経験したのである。
 - (1)よく宗教で、肉体の癒しのことを聞く。キリスト教でもそれはある。しかし、それは救いの本質、究極ではない。
 - (2)そのような経験と祝福も、神からのものであるが、同時に現世的なものである。
 - (3)イエス様の救いの本質、究極的救いは、魂の救いである。
 - (4)即ち、ここで神を崇め、感謝するために戻ってこなかった 9 人は肉体が癒されるという現世的な祝福は手にしたが、イエス様が私たちに与えようとしておられる永遠的、本質的、究極的救い、神と私たちを一つとする霊的祝福はまだであった。
 - (5)肉体的な救い・祝福は、しばしばそのような救い、霊的な祝福と救いを受けるきっかけ、またチャンスとなる。
 - (6)即ち、人々はそのような現世的な祝福から、まことの救いを必要とする自分の姿に気がつき、愛と力に満ちた神様の臨在に目覚め、まことの救いに導かれるのである。
 - (7)だから、物質的祝福、現世的祝福で、満足したり、そこで終わってしまっただけはいけない。そこから、それをきっかけにして、霊的祝福へと前進しなければならない。
6. しかし、ここで間違っていけないことは、この一人のサマリア人は、感謝するために戻って来たから、或いは、感謝をささげたから救われたのではない。
 - (1)彼を救ったのは、どこまでもイエス様が、19 節で言われているように、彼の「信仰」である。それは、「イエス様を救い主とし、神と崇める」信仰である。

(2)他の9人は、恐らくイエス様が誰であるかには余り関心がなかった。むしろそれが誰であれ、肉体の癒しを施す単なる魔術師のような人物でもかまわなかったのかもしれない。

結 論

- 結論として、最後に見たいことは、この一人のサマリヤ人が実行した「感謝の道」である。
- 彼のしたことは、何だったか？
 1. この男は、「喜んだ」「嬉しい」と言う「自己完結的感情」で満足しなかった。
 - (1)10人全員が、重い病気が癒されたことに大喜びしたのであろう。
 - (2)しかし、9人は「喜ぶ」ことで終わってしまったが、一人のサマリヤ人だけは、「喜ぶ」ことで留まることなく、もう一步「感謝」へと、その道を進んだのである。
 2. 彼は、犠牲を払って、まず神様のことを第一にした。彼は、「引き返してきた」(15節)のである。
 - (1)彼は、わざわざ同じ道を「引き返して」神様の元に戻って来た、とある。
 - (2)多くの人は、元の生活に戻れた、新しい生活が可能になったという人間的な喜びで一杯となり、それを可能にしてくださった神様のことなど忘れるか、後回しにする。
 - (3)しかし、彼はそうではなかった。彼は、祭司や家族への報告もそこそこにして、とにかく、イエス様がどこかに行ってしまう内にと、勇んでイエス様のところに戻った。
 - (4)それは、正に、まず神の国と神の義とを第一にする姿勢であった。
 3. 次に彼がしたことは、「**大声で神をほめたたえ**」(15節)たのである：
 - (1)彼は、自分の身になされた業は神様の愛と御力の故になされたことであることを深く認識し、
 - (2)それを単に自分の個人の問題だと言って、心の秘め事にしてしまわなかった。
 - (3)むしろ、それを公にし、賛美し、証したのである。
 4. そして、最後に、彼は、「**イエスの足元にひれ伏した**」：
 - (1)これは、礼拝の行為であり、また奴隷の行為である。自分の生涯を投げ出して、その人に委ね、仕えることを告白する行為である。
 - (2)この日から、彼は、イエス様を心の主、人生の主として、信頼のすべてをイエス様の上に置き、従って行くことを告白したのである。
- 最後に以前も引用した例話で締めくりたい：榊原寛先生の本に紹介されている例話である。昔、300両という大金を持って木曾街道を旅している一人の商人がいた。寂しい道にさしかかったとき、いきなり山賊に襲われた。この旅人は「金は奪われても、命あつての物種だ」と観念して、300両そっくり差し出す覚悟した。ところが丁度そこに、ひとりの侍が通りかかり、山賊を追い払ってくれた。命はもちろん300両も難を逃れたのである。彼は本当に嬉しかった。そして、その侍に300両全部をお礼に上げて良いと思ひながらふもとの宿屋にやってきた。二人はそれぞれの部屋に通されたが、商人は部屋に入りほっとした瞬間、「何も、全部あげることはないな」と思った。「100両ぐらいでもいいじゃないか」。やがて彼は「50両ぐらいでもいいじゃないか」と思ひ、それももったいなくなり、「せつかく苦労してためた金じゃないか。上げることはない」とまで思ひ始めた。そして遂には翌朝早く侍がまだ寝ているうちに、そっと起きて一両も置かず、礼も言わずに出立してしまったという。
- 「喜び」を感じたら、そこで終わらせず、「感謝」を直ぐに実行に移す者でありたい。